

北アルプス槍ヶ岳周辺および後立山連峰で見てきた、山のトイレについて

小尾 和男（フリーライター）

1. はじめに（簡単な自己紹介）

1997年春、新人の小屋番として北アルプスの槍沢ロッジに入り、半年間勤務。翌年から2000年までは稜線にある槍ヶ岳山荘に移り、槍沢ロッジ同様、1年のうち約半年間をそこで過ごす生活を続けた。

その後は夏の間だけ北アルプス後立山連峰のパトロールに参加することとなり、登山者への啓発活動や登山道の整備、遭難救助に携わってきた。

ここでは北アルプスと関わるようになってからの十数年において見聞してきた北アルプスのトイレ並びに山岳環境の問題について、簡潔にまとめてみたいと思う。

2. 槍沢ロッジ時代

私が槍沢ロッジに入ったのはトイレが土壌処理方式に変わる直前であった。トイレの便槽にホースを突っ込んでからバキュームで吸い取り、タンクがいっぱいになるとホースを抜いて樹林の中にある「溜め池」に流すのだが、一般登山者には決して見せられない光景である。

槍沢ロッジのすぐ前には水量豊富で美しい溪流があるのだが、ずっと上流には他の山小屋があり、尿尿を地下に浸透させていたと思われる。よって目の前にある川から取水するわけにはいかなかった。

槍沢ロッジから徒歩で20分ほど登ったテント場（旧槍沢小屋跡地）から、対岸へ渡って横尾尾根から流れ出る沢を少し登り、取水用の石油缶を設置していた。そこから延々とホースを引いて、槍沢ロッジまで送っていたのである。槍沢ロッジ～テント場間のホースは設置したままだが、テント場から先は雪解けになると設置して小屋閉め前に撤収していた。その作業がなかなか大変であり、「小屋の真ん前にあれだけ水が流れているのに、わざわざこんなところから水を引かないといけないのか」と思ったものである。

3. 槍ヶ岳山荘時代

翌1998年、槍ヶ岳山荘に異動となったのだが、ここのトイレもまだ改装前であった。館内には3ヶ所、テント場に1ヶ所のトイレがあり、すべてが自然に流すタイプである。

槍ヶ岳山荘は日本でもトップレベルの宿泊者数であり、便槽にたまる尿尿の量も相当なものだった。夏が終わると尿尿を流す作業に取りかかるのだが、これがほぼ一日がかりである。仕方が無いこととはいえ、これだけの尿尿を自然の中に流すことに対して、多少なりとも罪悪感を感じたのは事実だ。

なお、この年は上高地周辺を震源とする群発地震があり、槍ヶ岳周辺では1ヶ月以上揺

れが続いた。8月15日だったと思うが、夜明け前に激しい揺れがあり、明るくなってから周囲を確認すると玄関前等が激しく崩落して大変な騒ぎとなった。この時にはトイレの便槽が一部崩壊してしまい、便器から下を覗くと飛騨沢のずっと下部まで見えた。また便槽から尿尿を流す穴がふさがってしまったため、尿尿がたまったままの便槽内に先輩が入り、ほぼ素手の状態で石を取り除いていたのも覚えている。

地震によって被害を受けた槍ヶ岳山荘だが、翌年までにはなんとか土砂崩落した部分の補強工事が終了し、トイレの改装工事を始めることができた。私は解体工事を少々手伝った程度だが、ヘリコプターによる工事資材の荷揚げには携わった。これがまた膨大な量であり、ヘリポート周辺に山と積まれた資材を見ては、荷揚げの費用だけでもどれだけかかっているのかと戦慄を覚えたものである。

槍ヶ岳山荘のトイレも最初の工事では土壌処理方式を採用したのだが、テスト用ということでおがくず利用のバイオトイレを1台、テント場のトイレ脇に設置していたのを覚えている。おがくずの中に糞便が入るとそのまま分解されるという説明だったが、この時はうまく作動してくれなかった。便器の前半部がメッシュになっていて便と尿を分離する仕組みになっていたのだが、このメッシュ部分にトイレットペーパーが張り付くと尿がそのまま便槽の方に入ってしまうのである。もちろんトイレットペーパーを中に入れないように注意書きを貼ってあるのだが、そのまま中に入れてしまう人が続出した。

この当時、HAT-Jが作成した、トイレットペーパーを便槽の中に入れないようにしましよと呼びかけるシールが槍ヶ岳山荘にも送られてきており、各トイレにダンボール箱を用意して使用済みペーパーの回収を行っていたのだが、毎日使っている自分でさえ、早朝寝ぼけた状態でトイレにいくとついうっかり投棄してしまったものである。だから下界で普通に暮らしている人がうっかりトイレットペーパーを分別できずに投棄したとしても、無理はない。それに繁忙期となるとすぐに箱が使用済みペーパーでいっぱいになってしまい、仕方なく便槽内に入れている人も多かったようである。

槍沢ロッジも槍ヶ岳山荘も、トイレが完成するとお客さんからの評判が非常によく、働いているときによく「トイレがきれいですね」と声を掛けられたものだ。ただお客さんにとってはトイレがきれいなことがポイントであり、環境に配慮したトイレで改装に非常にお金がかかっていることまで理解している人は、ほとんどいなかったと思う。

私が山小屋にいたのはこの土壌処理方式が導入された時までであり、その後の便尿分離式テイクアウトトイレやおがくずバイオトイレの導入については第10回のフォーラム資料集に穂刈社長による詳細な報告があるので、是非一読されたい。

4. 後立山連峰をパトロールするようになってから

山小屋を辞めた後は、夏の期間だけ北アルプス北部山岳遭難防止常駐隊の隊員として山に入るようになった。北部地区常駐隊が担当するエリアは広大で、南は槍ヶ岳から北は白馬岳までである。それを5つの区域に分け、隊員をそれぞれ2～6名程度配置していた。

私は八方尾根を中心とする唐松班に最初は配属され、その後は鹿島槍～針ノ木岳を担当する冷池班、白馬岳周辺担当の白馬班と渡り歩いたため、針ノ木以北の稜線にある山小屋のほとんどに滞在することができた。現在はほぼ唐松岳周辺に配置が固定されている。

北アルプス北部のさらに北半分のエリアにある山小屋は、白馬山荘や五竜山荘を擁する白馬館か、村営頂上宿舎や八方池山荘を抱える白馬村振興公社が経営しているものがほとんどである。槍穂高連峰のように、1～2軒だけを所有するオーナーはあまりない。

各山小屋のトイレを覗いてみると、ほとんどが地下浸透式だ。中には斜面の上に小屋を建てているだけで、便槽すら無いところもある。この状況は現在でもあまり改善されておらず、北部地区をパトロールするようになってからの十数年でトイレを改善したのは冷池山荘と新越山荘、そして唐松山荘ぐらいであろうか。

各山小屋がトイレにまったくの無関心ということは無いようで、燃焼式のトイレを運用している山小屋はあるし、また過去に導入を試みたもののうまく動作しなかったことから元の地下浸透式に戻ってしまったケースもあった。だがトイレの改善が進まないのはおそらく入山者数の減少が大きいと思われる。

白馬大雪渓では2005年8月、杓子側にある通称「天狗菱」から大規模な崩落があり、これに登山者が巻き込まれて1名が死亡、1名が重傷を負った。翌年はケガ人が無かったものの、主稜側から大規模な土砂崩れが起きている。また2008年にはガイドとその顧客の2名が土砂崩れに巻き込まれ死亡しており、白馬大雪渓は危険なルートという評判が定着してしまった感がある。その影響だろうか、北アルプス北部後立山連峰への入山者数が長野県内の他の山域と比較して減少したままあまり戻っていないのだ。

長野県警のデータによると北アルプスの槍穂高連峰と後立山連峰はともに平成13年あたりから入山者数が減少している。どちらも約16万人ほどだった入山者が平成18年になると槍穂高連峰は約12万人、後立山連峰は約8万人と半減してしまった。その後は入山者数が盛り返し、槍穂高連峰は24万人近くまで増えているようだが、後立山連峰に至っては毎年10万人程度とほぼ横ばいで、完全な回復には至っていない。2007年には村営の白馬尻荘が休業してしまったぐらいであり、この状況下では山小屋を改築したりトイレを改善しようという気には中々なれないのではと想像する。

5. 燃焼式トイレ

北アルプス北部には株式会社ミカサ製の燃焼式トイレ「ミカレット」を採用している山小屋が2軒ある。ひとつは白馬館経営の白馬尻小屋で、もうひとつは鹿島槍～針ノ木岳間にある新越山荘だ。

槍ヶ岳山荘にいた当時、手元にあった資料を元に燃焼式トイレのランニングコストを戯れに計算してみたことがあった。下にあるヘリポートから遠く、標高も高い槍ヶ岳山荘の場合、ヘリコプターの荷揚げ費用が他の小屋よりも高くなるため、糞便を燃焼させるための燃料の輸送も相当なコストになってしまう。よって計算してみると、けっこうな金額に

なって驚いたのを覚えている。

白馬尻小屋は標高が低くほぼ山麓にあることから、ヘリコプターのコストが比較的安く上がると思われる。また新越山荘の場合は標高 2500m 近い稜線にあるのだが、利用者が少ないこと（収容人数 80 名）と、宿泊者数が多い山小屋を他に 2 軒抱えていることで、コストを吸収しているのだと思う。だが原油高が続く最近の状況では、相当な負担になっているのではないだろうか。

6. 唐松山荘の土壌処理方式トイレ

私が北アルプス北部でパトロールに参加しはじめた頃から、唐松山荘では改装工事が始まっていた。およそ 10 年をかけてつい最近、工事が完了したのであるが、この時にトイレも土壌処理方式に変更されている。それ以前は確か、ヘリコプターによる搬送だった。なおトイレは簡易水洗で、トイレトペーパーを分別するためのゴミ箱が設置されている。

唐松山荘には外トイレが無いため、外来の利用者は登山靴を脱いで山荘内のトイレを使うことになっている。受付のすぐそばに料金箱があり、利用者はそこに 200 円を投入するシステムだ。日帰り登山者がやってくる時間帯の場合、受付には常に人がいるので料金未払いはほとんど無いようだ。

登山靴のまま入れる外来者用トイレが無いことや、料金への不満は時々登山者から聞くことがある。が、八方尾根の場合、登山口の八方池山荘と第 2 ケルンにトイレがあり、屋外で済ませているケースはそれほど多くないと思う。

7. 白馬大雪渓コースの途中にある避難小屋のトイレ

白馬岳への登山コースとしてもっともメジャーである白馬大雪渓だが、昔は白馬尻から稜線付近までトイレが無かった。また身を隠せるような場所もほとんど無い。さらに雪渓によって身体が冷えるせいか、今も昔もトイレで困る人が多いようだ。

1997 年、小雪渓と呼ばれる地点に避難小屋を建築した際に、トイレも設置された。この時には稜線にある山小屋から電気を引いてきて、何らかのバイオトイレを動かしていたと関係者から聞いている。しかし稼働開始初日で処理能力がオーバーとなってしまう、以後は閉鎖されてしまった。

この避難小屋は 2006～07 年の冬に雪崩によって崩壊し、基礎部分だけが残っていたのだが、2009 年に再建された。以前の小屋は岩陰を利用していたものの、建物が岩陰からやや出ていたせいで飛ばされたようだ。ということで、新しい避難小屋はサイズをひとまわり小さくして設計されている。またトイレは廃止されたが、その代替として携帯トイレを使うためのスペースを設けているそうだ。

8. その他、北アルプス北部における山岳環境に関する話

①高山植物の保護

白馬グリーンパトロール隊は高山植物の保護を目的として結成され、7～8名程度の隊員が毎年夏の約1ヶ月半、白馬岳周辺をメインにパトロールを行っている。主な活動は登山道外への立ち入りを制限するためのグリーンロープ設置やゴミ拾い、登山者への啓蒙活動などである。他に富山森林管理署のパトロールも4～5名程度、後立山連峰の北部をパトロールで巡回している。いずれも短期間の雇用であり、大学生のアルバイトが多い。

高山植物の踏み荒らしを防ぐために、グリーンロープの設置は重要な作業である。が、隊員の数がエリアに対して少ないこともあって、雪解けと同時にロープを設置することが難しい。長年八方尾根を見ているのだが、雪が溶けたにも関わらず、ロープの設置が遅れたために登山者が通るラインがどんどん変更され、高山植物が踏み荒らされてしまうのをよく目にする。

②ニホンジカの進出

最近の北アルプスで気になるのはニホンジカの進出だ。数年前から目撃情報が流れるようになり、ここ最近の報道によると群れが定着しつつあるのではないかという話だ。長野では南アルプスでニホンジカが高山植物を食い荒らすという問題があったのだが、この時には進出が始まってから10年も経たないうちに酷い状況になっている。よって北アルプスへの進出に対しては長野県も対策を急いでいるようだ。

私は地元が東京の西多摩であり、奥多摩はよく登っている。その奥多摩でも十数年前からニホンジカが急増し、下草を食い尽くした結果、土砂崩れが起きている。そういう事例を知るだけに、非常に心配な問題である。

以上